

< 授業ノート >

短大生における保育に対する意識と保育理解

— 「保育研究」の授業を通して —

金子 亜 弥

Awareness and understanding of nursery in junior college students

— through teaching of “Nursery-study” —

KANEKO Aya

キーワード：保育者養成、保育、授業

1. はじめに
2. 埼玉東萌短期大学の保育者養成
3. 科目「保育研究」について
4. 授業のすすめ方
5. 授業の実例と学生の様子
6. おわりに

1. はじめに

現在、待機児童の増減に伴う行政のあり方や、男女問わず育休の取得、時短勤務等、ワーク・ライフ・バランスの考え方にまで、子育てを中心に様々な観点から議論されている。紙面を賑わす待機児童をみても、保育所の増設や設置基準の緩和、保育ママや家庭保育の容認、時間外保育の延長などの対処でも、保育士不足が解決しないまま、問題や課題が次々と起こり続ける現象を目の当たりにしている。これは保育所の問題だけではない。保育所は増設傾向にありながら、私立幼稚園は園児獲得に向け、また地域社会のニーズに応えようと延長時間を設けたり、子ども園へ移行したりと本来の保育時間を超えて保育にあたっている。このような社会の中で、将来の保育を担う学生達は、保育所ならびに幼稚園の役割や保育の神髄を理解し、保育の本質を見失ってはならないと考える。

本稿は、「保育研究」という1年生を対象にした選択科目の授業ノートが中心である。授業を通

して学生が保育についてどのように理解し、考えを持ったのかなどをまとめ、保育の本質を体験的に教示した授業内容を明示し、今後の課題へと繋げたものである。保育者の仕事に対するイメージを学生に問いかけると、子どもと遊ぶこと、が最も多い。このことから保育の勉強を始めたばかりの1年生にとって、様々な役割を果たす職務内容や発達をふまえた子どもの姿などをすぐに理解することは難しい。そこでこの授業では、一つ一つ保育に近づく段階を経ながら、保育の仕事を理解していけるように取り組むこと、保育に対する意識や理解を授業毎に確認し整理すること、次の授業内容に反映していくことなどを授業方法として取り入れた。学生の保育に対する考えや意識を知ることで、授業を通した保育理解へのアプローチの仕方を工夫する手立てになることを明らかにしたい。

2. 埼玉東萌短期大学の保育者養成

本学は、「以愛為人」（愛を以て人と為す）を建学の精神とし、「自尊・創造・共生」を学校訓としている。教育の根底にある人間教育は、人間性への探求であり、保育及び幼児教育にあっても充実したものでなければならない。保育者養成校として、保育・幼児教育の基本を学び、広い視野と深い専門的理解を持って論理的にものごとを考え実践できる力と、保育や幼児教育の本質を理解し

て対処できるものの見方や考え方を身に付けた人材の養成を掲げている。社会で即戦力となる、すなわち実践力のある保育者を養成することにある。

保育所保育指針ⁱでは保育士についての専門性を「専門的知識、技術及び判断」をもって保育をすることや、資質向上の要素として個人の「倫理観」や「職務及び責任の理解と自覚」などをあげている。また「常に自己研鑽に努め、喜びや意欲を持って保育に当たること」も示している。喜びや意欲を持つという姿勢は、授業への取り組みにおいても必要であり、専門性や資質向上の視点からも進んで学ぶ積極的な態度と結びつくこととなる。保育の「現場」と呼ばれる職場では、この積極性が必要とされ、子どもとのかかわりや仕事を覚えることの意欲や態度として、実習生への評価項目として記載している。(本学実習ガイドブック) また幼稚園教育要領ⁱⁱでは、幼稚園教育の基本のなかで「教師は、幼児一人一人の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。」とある。子どもを豊かに導く様々な役割とは何であるかを知ることが、保育を知る方法になると考えている。

現在2学年をあわせて142名(男子14名、女子128名)在籍しており、保育所、幼稚園、施設等の順に就職先を希望し、実現させている。

3. 科目「保育研究」について

(1) 「保育研究」の位置づけ

幼児保育学科として、本学の教育課程編成の基本方針における教育の目的は、保育・幼児教育の本質と目的についての理解、子どもについての専門的知見、保育・幼児教育の内容と方法についての知識・理解・技能の総合的な修得など、専門的なトータルな理解と実践能力である。

「保育研究」は、保育士資格を取得するための授業科目の、平成22年厚生労働省告示第278号別表第2による教科目において、保育士資格取得科目ではないが、学校独自の科目として開設されている教科目に位置づけられている。したがって

本学では「保育の実際の過程に触れて学習する機会を多く用意し、具体的な保育の姿を体験的に学習することによって、講義や演習、実技科目で学習した専門知識が生きて働く現場と突き合わせて理解できるよう、授業科目を工夫する。」科目として位置づけている。また「地域の保育園・幼稚園と協力し、現場での学習機会を日常的に用意し、園児とのさまざまな交流の場を設けて、現場の実際を深く学べる教育課程を用意する。」ことは、学修を生かして実践する科目であることを特色としているⁱⁱⁱ。

学修については保育全般の学びから、交流や実践できる体験の場としては、併設するM保育園への訪問により、学修と実践を並行して行う授業の充実を図ることができる。単にイメージしかない保育への認識が、実際の場においてその本質を知るという体験ができるからである。さらにはじめていく教育実習に先立ち、このような機会を得ることは学生にとって貴重な体験でもある。加えて本学の養成する人材像として、保育(幼児教育)の本質を理解し対処することのできる保育士(幼稚園教諭)の資質を考える良い機会とも言える。

(2) 授業内容について

この授業は、1年生前期、毎週金曜日5限に開講されている専門科目の中の選択科目である。先に述べた保育士資格を取得するための授業科目の学校独自の選択科目ではあるが、11月に行く教育実習に向け、特に実習日誌の書き方を詳しく学ぶための授業内容としてあることもここでつけ加えたい。すなわち、保育所と幼稚園それぞれに対応できる内容と方法を取り入れた総合性を持つことである。

授業として取り組む実践力の一つは、授業そのものが実践力に通じることにある。すなわち保育所や幼稚園での保育活動の一日の流れを把握し、保育者や実習生の動きを知ることや実習日誌の書き方などを学び、書けるようになることである。DVDの視聴や資料配布プリントをもとにおこなうが、学生からの質問や興味をもった内容、すぐ

に使える保育教材やミニゲームを用いて具体的に実習への取り組み方を学び、実習に生かせる授業とする。また、実践的な働きには、保育に裏付けされた意図があり、子どもの育てたい側面や指導上の配慮などの気付きが必要になる。ただ何となく好きなように遊ぶ、工作をする、絵本を見ろということではない理由が、活動のねらいとして存在しているということである。このねらいを体験的に学び、活動の記録として書いたり、もとにして立案したりできるということである。

もう一つは後半にM保育園に見学・観察に行くことから得る実践的な学びである。子どもの姿や保育者の動き、保育室の環境などに実際目向けようようにすることで、体験的に実習日誌の記入や活動記録の取り方が、実習生の視点でできるようになることをあげる。具体的には、引率教員が学生に働きかけながら子どもと関わり、その日のうちに振り返りを行い、次の訪問に備えるという取り組みである。なかなか自分を出せない学生や緊張感を持って臨む学生がいたため、教員のアドバイスを受けながら保育に参加できたことは有意義であったようだ。実際訪問後のリアクションペーパーには、回を追うごとに書く内容の量が増えていった。自分たちで感じ、考えた事、できなかったこと、できたこと、意外だったことなどを自分の言葉で書き、振り返りも自然とできていたのである。限られた時間と回数であったが、現場の雰囲気を感じていたようだ。またよくできなかったところ、苦手なところに気付き、実習を迎えるにあたり課題となるところに気付いた学生もいたのである。

つまり授業内容の全般に共通することは、保育や実習内容への理解と、具体的なイメージをもたせることであり、体験的な学習を通してより深めていくことである。

受講生は13名（男子3名、女子10名）であり、学年の2割も満たない少人数クラスとなった。全15回通して授業の主なねらいは、「保育の仕事をもっと具体的に知ること」にある。乳幼児への理解、保育者の仕事内容の理解、また「保育原理」「保育

内容総論」「教育実習」などの他科目との連動性も踏まえて取り組んでいる。「保育実習」だけは後期科目となるため、実習に関する基礎的な部分は教育実習の授業内容を参考にした。

初回は「保育」とは何かを問い、「遊び」との関係に気付かせる。遊びから学ぶとされる幼児の生活が、保育の学びの入り口であることをねらいとする。また他科目との重複を避けるために、DVDの活用や体験的な学習、事例の紹介、学生からの提案等も受け入れる授業形態として、この科目の独自性を出す試みとした。

学生に示される「保育研究」はシラバスで次のように記されている。

①授業の概要

保育所や幼稚園が担う保育の営みについて学習する。また保育とは何か、保育の基本理念、子どもの生活と保育、家庭や地域保育の考え方など保育の基礎概念を整理して理解する。11月の幼稚園実習に向けて、実習の目的・内容の理解や実習日誌の記入の方法、記録の取り方などについて、併設するM保育園へ見学に行き、実践的に学ぶようにする。はじめていく幼稚園実習を意識した授業である。

②授業の到達目標

11月に予定されている幼稚園実習に向けて、実習の目的・内容の理解や実習日誌の記入方法、記録の取り方を学び、部分実習で必要な保育技術を身に付けることが目標である。

③学習成果

保育・幼児教育の内容と方法を総合的に身に付けることを主とする。また保育・幼児教育への使命感と子どもへの愛情をはぐくむ、学んだ知識を生かすために専門的及び汎用的な技能や実践能力を磨くこと等をあげる。1年次でいく実習の成果につながることを期待する。

④授業方法

テキストは用いず、必要に応じて資料プリントを配布する。講義形式が主ではあるが、「子どもの姿」をこの授業の入り口として、保育や幼児教育の内容を理解していくことを前提とする。「子どもの姿」については、同時期に開講している他科目の授業内で、毎回事例を提出し、観察のポイント、書き方等について個々にコメントをつけ、翌週返却している。園生活での子どもの様子、園生活の全体的な流れ、保育者の仕事内容、教育実習に向けた取り組みとして、実習日誌の書き方へと進めていく。

授業を受ける姿勢として、積極性を持つこと、また部分実習で必要な保育技術としては、事例を紹介し、指導案の立案に役立つように助言をする。実習に臨む意欲や態度を育てると共に、一人ひとりに丁寧に向き合う。実習への期待や不安をあえて表に出すことができるような雰囲気大切にし教員が授業内容に反映するなど、不安となる材料を取り除くことができるのではと考え試みた。

⑤成績評価の方法・基準

授業への積極的な取り組みや態度を主な評価とする。教員からの投げかけに対する応答の仕方や意見発表の態度などである。その他は提出物として授業毎のリアクションペーパーの内容とする。

実習日誌の書き方については、M保育園での記録の詳細性や日誌についての資料をもとに、どれだけ確実かつ確に書くことができるのかを評価基準とする。

⑥授業計画

1年生対象で前期15回の授業計画は次(表1)の通りである。主な内容の他、学生からの要望で、個人票の書き方や指導案の立案や手遊びなどを加えた回もある。また第12回～14回の3回は、併設園であるM保育園を訪問し、見学と観察を兼ねて保育に参加した。毎回講義室でガイダンスをしてからM保育園へ行き、また戻ってきてその日のうちに振り返りをおこなうという流れである。教員が引率し、学生の様子を見まわりながら適宜ア

ドバイスをする。

表1 「保育研究」指導計画

回数	主な内容
第1回	オリエンテーション、2年間のスケジュール
第2回	保育とは
第3回	幼稚園・保育所の一日について
第4回	実習の目的理解
第5回	実習の目的理解：観察実習と参加実習
第6回	幼稚園実習の目的と実習の流れ
第7回	幼稚園の一日の流れ、幼児の姿
第8回	実習生の活動
第9回	実習日誌①日誌の目的
第10回	実習日誌②作成指導
第11回	実習日誌③日誌の作成
第12回	実習日誌④まとめ
第13回	実習のねらいと目的設定
第14回	オリエンテーションについて
第15回	実習初日の流れ

4. 授業の進め方

授業概要にある授業計画の通りに進める。各回授業の終わりにリアクションペーパーへの記入をしてもらい、授業時間内に提出、次の授業時にコメントをつけて返却する。そこに書かれてある内容から、前回授業の振り返りや質問を受ける時間を有効活用していく取り組みをする。実際には教育実習(幼稚園)Ⅰの授業で、学生自身が難しいと思われる事項について復習しながら、学生一人ひとりの理解度を把握し、指導していくことができた。そこで授業を重ねるにあたり、次のように授業計画の内容を整理した。

①具体的な「保育」への理解

パネルシアター、手遊び、しりとり、ジェスチャーゲーム、積み木・ブロック遊びなどの実演や紹介をし、実際に演じたり遊んだりする。

②実践的な保育に触れる

M保育園へ行き、クラスの様子を見学し、一緒に子どもと遊ぶ。

③学生の保育への理解度にあわせた指導

自ら進んで考え、知ろうとすることで、保育への理解を深められるようにする。

④少人数を生かした授業作り

学生からの意見や質問が出やすいように、常に対話をしながら授業をすすめる。

⑤前回のふりかえりをする

毎授業後に書くリアクションペーパーの内容をもとに授業を展開する。

5. 授業の実例と学生の様子

筆者が試行した実際の授業内容と、その時の学生の様子やリアクションペーパーの内容から様々な点に気付くことができた。特に幼児の遊び体験とM保育園見学の具体的な試みについて触れてみたい。

(1) 遊びから学ぶこと

これは第1回と2回の授業後半におこなったしりとりとジェスチャーゲーム遊びの実例と学生の様子である。「保育」をすることと、「遊ぶ」ことは明確には異なる。子どもと一緒に遊ぶことが保育者の仕事というイメージを持つ学生達には同じように思えるかもしれない。しかし保育とは一般的に保育所や幼稚園での教育を意味し、子どもにとっての遊びとは生活そのものであり、様々な経験が成長発達に欠かせないものとして理解されている^{iv}。このことから、まず遊びを取り入れてみたのである。

しりとりでは、「りんご」9人／12人中（以下回答人数のみ記載）、「ごりら」「こま」「らっぱ」各7人が多く、「つみき」5人「すいか」「りす」4人、といった果物や動物、身近にある物など親しみやすい名前が多くあがった。他には「ダンゴムシ」2人、「かみしばい」「しまじろう」「ぬいぐるみ」各1人などもあった。約5分間で7～27の単語を並べ、最後に「ん」の付く「きりん」「れもん」「だいこん」で締め括った学生が3人いた。

子どもでもすぐにイメージしやすい名前が多かったことから、遊びを通して普段の生活から言葉

を見つけることの大切さを知る保育の展開例であることを理解させた。

しりとりは遊びであり、言葉や文字、絵カードを使用すれば視覚教材にもなる。ジェスチャーを加えれば身体表現にもなるだろう。言語的活動でありながら、自然とその物を思い浮かべるであろうし、言葉を繋げることとイメージを結び付けさせる想像力も必要となる。対象年齢によって内容やルールに変化をつけられるなど、万能の遊びである。けれども学生達は、当初まだ遊びとしての概念しかなく、言われてみればそうなのかな、というくらいの反応であった。遊ぶ本人（学生）が子どもの気持ちに成りきっていないことが原因だと考えるが、この遊びから何を学ぶか、何を育てたいか、経験値が何と結びつくのかまで思考を巡らせることが、保育を考えることである。

ジェスチャーゲームでは、問題を出すグループと答えるグループが交互になることで、正解が続くようにすると両方共に加点されるという勝ち負けのない独自のルールを試した。すると途中で勝負が付かないことに気付いた途端、学生達はつまらなそうにしはじめたのである。このねらいは、遊びを楽しむ大人と子どもの感覚の違いを知らせることを意図し、子どもの姿を理解して保育にあたることを間接的に示した。子どもにとって、このルールの良さは、勝敗を気にしながらも、双方が勝つことができるため、みんなで一体感を味わえ気持ちよく終えることができるのである。

子どもの気持ちを汲み取りながら遊ぶことは、保育者が一人ひとりの子どもをよく見て保育をおこなうことに通じている。違うことは、保育者（大人）と子どもの思いや感覚である。そこに気付き意識しておかないと、保育の主体が子どもに向かないということなのである。実際の学生の様子は、まだ自分の気持ちや感覚を優先してしまう傾向があると言える。つまらなく感じた原因は大人の感覚であり、それならば子どもだったらどこが、何で面白いと感じるのか、どんな動きをこのゲームでするのかまでを考え予測することが、子

どもの姿を理解することになる。保育活動の主役は子どもであり、自主性を取り入れた立案は、子どもが興味をもちそうなことや面白いと感じるものを、探し当てる作業であると考えている。そこに遊びから保育への流れがあると考ええる。

つまり、遊んであげるや遊ばせるという、「～してあげる」「～させる」という意識を保育にもたせないことである。自らかかわることができるようになるためには、保育者として何をしたらよいかを考え深めることが、保育のあり方を追及し、保育への理解に結び付くと考ええる。

(2) 子どもの気持ちに近づくこと

—積み木とブロック遊びを通して—

次に第4回の授業後半におこなった積み木とブロック遊びの様子である。この回より実習に向けた内容になり、まずはじめは実習の目的を理解することを主な内容とし、ねらいは実習をすることの意義を知る、とした。

実習の目的理解のために、遊んでみようということで、講義室から保育演習室へと移動した。保育演習室とは、保育室にあるような積み木やブロックといった遊具や、パネルシアターやエプロンシアター、人形劇の舞台などの教材が置かれてあり、学生が自由に使用できる教室である。40分程の時間をとり、3種類の遊具を出し（積み木1種類、ブロック2種類）自由に遊んでもらった。学生達は遊びを取り入れた授業に慣れてきて、「懐かしい」と言いながら童心に返ったように積み木とブロックで遊んでいた。

この授業後のリアクションペーパーの内容は次の通りである。

- 1 子どもが好きそうな遊びがみつかりましたか。自分が気に入った遊び方ができましたか。
- 2 遊びの輪に入らず、ただ見ているだけの子どもがいたとします。その子どもの気持ちを考えてみましょう。

1の回答からは、この遊びで見い出したこと、2からは、子どもの気持ちを読み解くことを目的としている。1では、3種類の遊具を中央に置い

ただけで、特に指示を出していない。予想では人気の物に集まり、その遊具の魅力を見つけてみようと思っていたが、はじめてみると自然と3グループに分かれて遊びはじめた。学生の回答によると、どれを用いて何をつくったのかよりも、「みんなのと合体した」「たくさんの人と一緒につくった」という理由での楽しさが書かれてあった。魅力は物ではなくて人、友達であったということだ。もし友達ではない人とやるとしたら、違う回答が得られたかもしれない。今回は懐かしさを感じた積み木やブロック（物）よりも、クラスの友達（人）への興味や関心の方が上回った結果となった。幼児はこの傾向は月齢が高くなるほど顕著にあらわれる。ブロック（物）自体の固執性よりも、友達（人）が使っているからその物に拘る、という物の取り扱い場面から、遊びと育ちの関係を保育の視点で考える場合によく事例として出される。

表2は1の回答をまとめたものである。一番多かった遊びの感想に書かれた言葉と、それによって何が遊びから見い出せたのかを育つ側面として、さらにその要因となる一例をあげてみた。

表2 積み木・ブロック遊びと育ちの相互性

遊 び	→ 育つ側面	⇔ 要因
楽しい	→ 感情・思考	⇔ 経験
片付け	→ 協調性	⇔ 規律
コミュニケーション→社会性		⇔人間関係

はじめに、「楽しい」という気持ちは、活動となる一番の要因である。感想の中には、全体的に「楽しかった」と「片付けが楽しかった」というのがあった。この場合後者は、全体を通した感想より具体的な「片付け」に注目している。遊んだ後の片付けは、子どもが嫌がる場合がある。けれども身支度や持ち物の整理整頓と同様に、園での生活習慣の一部とっていいほど、毎日おこなわれている。保育用語として「片付け」をみていくと、強制することは主体性の抑制になりかねないとし、原則として保育者がおこない、そこに子

どもが手伝いとして加わる、という意識の持ち方がよいとある^v。つまり強制されない活動でありながら、保育者を真似て同じ動きをし、仕分けや環境としての場の整備や準備をする行為であるといえる。強制されることなく、自ら必要性を感じてできるようにすることが、自主性を育てる「保育」ということになるだろう。

使用した積み木は、正確に並べないと収納箱に収まらず、簡単にできると思っていたのか、全部取り出してはやり直していた場面があった。その時の感想だと思われるが、「嫌だ」とか「面倒」ではなく、その作業が楽しいと感じたところを子どもにいかにかえられるかが、重要となる。片付けをやらなければならない (must) と思うのか、楽しみながらする (do) のかで、子どものやる気は全く違い、もちろん楽しくできてかつ身に付けられる方がよいと考える。

つぎに保育としての「コミュニケーション」をみていくと、「乳幼児が要求をまだ何らかの手段で表現できなくとも、養育者や保育者が子どもの意図や気持ちを汲んで、あたかも自分に要求を伝えてきたかのように思いなして対応することが重要である^{vi}。」(傍点付けは筆者)としている。実際お互いの意思疎通が言葉以前の働きとして存在することで、信頼し合う関係をもつことができるのである。

さらに、園生活という集団で過ごす社会の中では、規律を守り、道徳性をお互いに持つことが、人間関係を円滑にできる技でもある。遊びが生活そのものであるように、遊び＝保育の構図が見えてきたことが、学生の書いた内容に表れている。この回ではあえて、子どもの気持ちになって遊んでみよう、ということを掲げていた。けれども2の回答では、「一緒に遊びたいけれど、言えない」「遊ぼうと言って欲しい」「人見知り」「やりたい遊びがなかった」などの主観的な答えと「一緒にやろうと言ってあげる」「先生が声を掛けてあげる」など、客観的な立場で、どのように言葉をかけたらよいかなどの答えもみられるようになった。他者の気持ちを思い図るのは、目前の子どもの姿

を理解しようとする自分(学生)である。「子どもの気持ちを考える」という質問事項に対して、保育者や周囲の人(子ども)達の言動を書き加えていたことは、保育事例として思い浮かび、受け止めたのではないと思われる。積み木やブロック遊びをして、それぞれの子どもの気持ちを汲んだ回答の中から「先生(保育者)」が登場したことは、遊びを保育としてみるようになってきたのではないだろうか。

学生が遊具遊びをすることは、子どもや保育者の気持ちを体験的に気付いたり、考えたり、幼少期を思い出したりすることで、遊びの意義と保育について知ろうとする手立てになると考えている。

(3) M保育園見学(第12～14回)

はじめて行く実習では、園の保育や子どもの様子をよく知るために、子どもをよく見る必要がある。子どもを観察するために、同時に二つのことが進行していなければならないのは、「起きた事実を忠実に追う目の働き(これには冷静さが必要)」と「行動の内側にある子どもの要求・動機などを推察する心の働き(これには、子どもに対する温かい愛情が必要)」^{vii}であるという。子どもの気持ちに近づくためには、目の前で誰(何)がかかわり、どのようなねらいや意図があって保育が展開され、遊びがすすんでいるのかをしっかりと把握できる視点を常にもつことだと考える。

現場での学習の機会は、保育を知り、保育者・実習生となった自分のイメージ、保育者の動き、自分の目標や課題などを一度に学べる機会である。見学も兼ねて子ども達と遊ぶことから、ボランティア体験として、毎回押印した誓約書を保育園に提出した。誓約書を書くことでもかなり緊張している様子がみられた。見学前には担当教員より簡単なガイダンスをうけてから、2歳児～5歳児クラスにそれぞれ分かれて入った。毎回保育園から帰ってきて、すぐに感想を書いている。この体験から、学生の保育に対する気持ちの変化や、気付きを知ることで、筆者自身が抱えている学生にとっての的確なアドバイスができることにもなる。

1 回目の内容（表 3）は、ほとんど全員が見学時の子どもの様子と、それに対しての自分の感想を短めに書いて終わっている。その中で二人の学生（A 子と B 子）は、予想しなかった子どもの反応への戸惑いが大いにあらわれている。

表 3 M 保育園見学後の感想（見学 1 回目）

自分の気持ち	子どもの姿
・戸惑う ・かわいい ・大変 ・楽しい ・自分から話しかけた ・気持ちが空回り ・どうすればいいかわからない ・何を言っているのか（子どもの言葉が）ききとれない 等	・ケンカ ・おとなしい ・一緒に絵本をみる ・大声を出す ・積極的 ・自己主張が強い ・先生の方へ行ってしまう ・一人遊び ・遊びに誘ってくれる ・ずっと同じあそびをしている 等

・最初はどうか戸惑ったけれど、（中略）他の子どもとあまり関わることができなかった。そういう場合はどうすればいいのかわからなかった。次はもっと多くの子どもと関わりたいと思った。（A 子）

・どう子どもと接していいかわからなかった。子どもの言葉がよく聞きとれず、何を言っているのかもわからなくて困った。どこまでがダメなのか、どこから注意をすればいいのかわからなかった。（B 子）

これに比べて 3 回目は（表 4）、「どのように～したらよいか」という記述が多かった。また子どもの様子にしても、周囲の状況を踏まえながら捉えていて、1 回目のように子どもの姿を一言で断言するような記述が減った。つまり具体的な子どもの様子や、保育としてのかかわり方を模索しようとした働きが強くなってきたと考えられる。C 子の感想からは、何かしなくてはいけないあせりと、上手いかないもどかしさで、必死になっている様子が伝わってくる。

表 4 M 保育園見学後の感想（見学 3 回目）

自分の気持ち	子どもの姿
・おとなしい子にどう接したらよいか ・絵本を読む時、どんな言葉かけがよいか ・覚えていた子がいて、うれしかった ・少し大変 ・楽しくて疲れた 等	・ブロック遊びの発想力がすごい ・椅子から自分の膝の上ののってきた ・たぶん人見知り ・遊びでもめる ・ケンカがはじまったり泣いたり 等

・読み聞かせの時、5 人に読み聞かせていて、その中の 2 人が途中でケンカした時、2 人に話を聞こうとしたら、他の子たちが早く、とか、（中略）読み聞かせが止まってどこかにいっちゃったりしたからどうしたらいいのかわからなかった。本を読んでいて先が気になるのか、読み終わってないのに次のページに進めちゃう子がいて（中略）どこに座らせてどこで読み聞かせたらいいばんみんなが見やすいのか、どういう声かけが理解しやすきいてくれるのかで悩んだ。（C 子）

表 5 環境設定における気付き（見学 2 回目）

環境設定	学生の気付き
トイレ	幼児用便器の大きさ
遊 具	・ 3、4 歳児クラスは保育者が設定し、5 歳児クラスは自分が使いたいものを出す ・ 手作りおもちゃがある ・ 片付け方のルール
保育室内	遊びによって場所を分けている

2 回目の見学時は、環境設定を学んでくるという課題を出した。しかし、子どもの姿などは前回以上に書かれていたものの、環境設定の気付きが少なかった（表 5）。その理由は、目前の子どもに全力で向き合い、保育環境までみてる余裕がなかったものと推察される。先に環境設定を意識させて学ぶことが必要だったと反省している。

全 3 回を通して「最初はとても緊張してしまっていたが、2 回目になると少し慣れて楽しくなってきた、最後はだいぶ慣れてきて、子どもに目を配ることができてよかったです。（C 男）」という感想があった。緊張感の中にもだんだん慣れて楽しく

なってきた様子は、引率していたのでよくわかった。あらためて振り返ると次のような感想がよせられた。

- ・子どもの接し方、見守り方を知った。
- ・事例と同じことが起きた。
- ・もっと子どもの発達段階を勉強したい。
- ・実際のイメージがつかめた。
- ・読み聞かせの工夫やケンカの対応を知りたい。
- ・年齢によって特徴がある。
- ・授業ではわからないことがあって、実際に行ってみたらいろいろわかった。
- ・子ども達は思ったよりも積極的。
- ・仲直りする力があるのだと知った。
- ・授業で学んだ事を、現場で実際にできて良かった。ただ上手にできたとは言えない。(D男)

見学後の感想は自由記述なのだが、回を追うごとに感想の文章量も増えていった。自分の感想だけだった学生が、2回目からは子どもの姿を詳細に書くようになったことは、保育意識による気持ちの変化の表れや、子どもをみる視点をもつようになったと考えられる。またD男は自分自身の振り返りまでおこなっている。保育園見学の意義は、保育を意識して考えるよい機会だったといえよう。また実際の学びの意味も大きい。

以上により、遊びや職場体験が、共に育ち合う保育への理解を深めるきっかけになると思われる。どちらも自然に学生の学習意識を高め、教育実習に向けての有意義な内容であったと考える。

6. おわりに

しりとり遊びからはじまったこの授業は、遊びから学ぶといわれる子どもの姿を「大人」が再現して改めて「保育」への理解をはじめの入り口となるものであった。学問の入り口が「遊び」で面食らった学生もいたようだが、しりとり、ジェスチャー遊び、ブロック遊びと保育者がどのように提示して遊びを展開させるのか、どんな楽しみを

味わわせるのかなど、保育についての考え方を少しずつ感覚的に捉えていけるようにした。

ここで今後の課題について整理しておきたい。「保育」についてももう少し掘り下げて考えていくことができなかったのはなぜか、という問いである。実践的な保育の種類や保育方法は、まだ実感がわかないのではないかと、併設するM保育園へは、授業時間を使用するため、回数や時間（毎回1時間程度）には制約があった。それでも学生達は保育への見学・参加を通して、実習への心構えや緊張感、子どもへの接し方などを体験したり考えたりする有意義な時間だったと感想を寄せていた。この体験を実際に日誌書きに応用したのだが、日誌は大変、時間がかかる、何を書いてよいかわからない、難しいなど、実際の現場で感じ、更に今後の学びや各自の課題につなげることができたのではないかと考える。金曜日授業の利点からか、一週間の全体の授業の振り返りでもあるように思えた時期もあった。

保育への理解と実践を通した理解についても、いろいろと盛り込みすぎた反省や、果たして遊びを通して保育への理解ができたのかどうかも問い直しである。学生の保育観を引き出すことも感触や手ごたえはあったものの、少し弱かったように感じる。けれどもこうした取り組みを続けて多角的なアプローチを続けていくことが、保育を知ろうとする学生の自主性にもつながると思う。

そのためにも教員は研究的態度をもって教材研究をすることが重要であると考えます。

引用文献

- i 厚生労働省 (2008)『保育所保育指針解説書』, フレーベル館.
- ii 文部科学省 (2008)『幼稚園教育要領解説』, フレーベル館.
- iii 「2015 学則・規程集」, 埼玉東萌短期大学 pp.17
- iv 森上史郎・柏女霊峰 (2015) 保育用語辞典, 「保育」「遊び」の項, ミネルヴァ書房.

- v 同上「片づけ」の項.
- vi 同上「コミュニケーション」の項.
- vii 森村真理子 (2014)『保育実践の創造』,pp.42
ミネルヴァ書房.

参考文献

- ・ 小川博久 (2013)『保育者養成論』, ミネルヴァ書房.
- ・ 津守真 (1997)『保育者の地平—私的体験から普遍に向けて』, ミネルヴァ書房.
- ・ 水野志・久保いと・民秋言 (2014)『保育者と保育者養成 (戦後保育 50 年史第 3 巻)』, 日本図書センター.
- ・ 森上史郎監修 (2015)『最新保育資料集 2015』, ミネルヴァ書房.

金子亜弥 (埼玉東萌短期大学専任講師)